

このコーナーでは、水資源機構の環境保全の取り組みを紹介します。

下久保ダム管理所

三波石峡とともに歩む下久保ダム

三波石峡は古くから景勝地として知られ、美しい紋様の三波石は庭石としても珍重されています。また、日本の変成岩研究の出発点・揺籃の地とされ、昭和三十二年には国の名勝及び天然記念物に指定され多くの観光客で賑わい、地域の誇り・アイデンティティでした。

ところが、昭和四十四年に完成した下久保ダムと発電所の運用によって社会が発展する一方で、三波石峡の様相は一変。水の流れが途絶え、石は黒ずみ、雑草が繁茂し、訪れる観光客は激減しました。

水の流れを回復させた水環境改善事業

下久保ダムに貯えた水を流すときは、水が流れ落ちる力を利用して電気を作り出した後約3.0キロメートル下流に放水されるため、三波石峡には水がほとんど流れなくなりました。しかしその後、平成十三年に発電施設を改造してダム直下に放流口が新設され、ここから放流することにより三波石峡に清流が蘇りました。

土砂掃流試験で輝く三波石

平成十五年からは、台風等による増水時に、より自然の流れに近くなるよう土砂を混ぜる土砂掃流試験を開始しました。これは、地元の古老が「台風は銘石の化粧水」と呼んでいたことにヒントを得たものです。その効果は絶大で、台風一過の朝には三波石が磨かれて光り輝き、一部では雑草が駆逐され河原を散策できるようになりました。

また、人工的に小規模の出水を発生させるフラッシュ放流※を行うことにより、三波石峡に土砂が流下する回数も増加させています。

モニタリング調査と今後

土砂掃流試験の効果を把握するため、銘石の写真撮影や藻類などのモニタリング調査を行っています。三波石峡に

水と土砂の流れが回復したことにより、河原の再生や川の中の藻類も定期的に更新され景観が蘇っている様子を確認しています。

平成二十九年には、三波石峡が文化財に指定されてから六十周年を迎えたことを記念して、地元の漁業協同組合により稚アユが放流され、五十年振りにアユ漁が行われました。今では、三波石峡もアユが育つほどに環境が回復しています。

三波石峡とともに歩む下久保ダム

下久保ダムによる洪水調節・利水補給・発電といった効果は社会を豊かにした反面、三波石峡の文化や河川環境に影響を与えてきましたが、関係各位の弛まぬ努力により見事に回復しています。今後も下久保ダムは地域のアイデンティティ・三波石峡とともに歩んで参ります。

※フラッシュ放流とは、ダムからの放流量を一時的に増やし、川や石などに付着した泥や藻類等をはがし、河床をリフレッシュすることで、河川に生息する魚などの生物にとって良好な環境への改善を目指す取り組みのことです。



銘石、袖石を望む
下久保ダム



三波石峡で育ったアユ